

---

## 抱えきれぬ想い ルーフェイア・シリーズ03

こっこ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

抱えきれぬ想い ルーフエイア・シリーズ03

### 【Nコード】

N9282D

### 【作者名】

こっこ

### 【あらすじ】

たどり着いた、明るい夢の場所。だがなお、過去の影はまとわりつく。心優しい美少女が繰り広げる、異色の学園ファンタジー第3弾 学院へと来たルーフエイアと、出会った先輩との物語です。世界観や基礎技術も出てきます 「無情」という名の条理がある」とまで言われた、ひたすらビターな世界をどうぞ 携帯版は1行毎の改行です 7桁Hitサイト掲載の第3作です

## Episode:01

Loa side

街はもう、いつもの知っている街ではなかった。

時折響く砲撃の音とともに、建物がえぐられ、崩れていく。

道路に人影はない。ところどころに倒れている者がいるだけだ。

その中を、母に手を引かれながらロアは走っていた。

その少女を見下ろす、今の自分がいる。

(また、夢……)

今まで幾度、この夢をみただろう？

だからこの後どうなるか、すべて知っていた。

「ロア、いい？ この道路を渡るけど、とまっちゃダメよ？」

「うん、わかった」

母の背には、まだ幼い妹が背負われている。

妹は2歳だった。

十字路の手前、建物の陰で親子は立ち止まる。

「いち、にの、さんで行くからね？」

「うん」

母親は背負っていた妹をいったん下ろし、今度は大切に抱きかかえた。

そして辺りを見回す。

「行くわよ……いち、にの、さん！」

母親が飛び出す。

次いでロアも。

教えられたとおり体制を低くして、できるかぎりの速さで。  
だが。

「あつ……！」

砲撃で荒れた舗装に足を取られ、転倒する。

「ロア！」

娘を気遣って母親が立ち止まり、振り返った。

「早く、こっち」

そこで言葉は途切れ、鮮血が散る。

「ママ……？」

どさりと音を立てて、母は倒れた。

「ロア、だめ……逃げて……」

「ママ！」

慌てて駆け寄る。撃たれなかったのは、奇跡かもしれない。

「ママ……ひつー！」

母親と抱かれている妹の背から、信じられない量の血があふれ出てくぼみに溜まった。

思わずあとずさる。

「ロア……逃げ……な……」

それが最後に聞いた母の声だ。

そして、目が覚めた。

（……あゝあ。夢見、サイテー）

もうあれから8年も過ぎているのに、まだ時折この夢を見る。

(でも……やっぱ、しょうがないかな?)

一生忘れられない記憶。

それならきつと、一生この夢は見続けるだろう。

ベッドの上に起き上がる。

「さあて、今日の予定は、っと」

わざと声に出した。

単純と言えば単純だが、この方法はけっこう、ブルーな気分を吹き飛ばすのに効果がある。

「自主学習ばつかだな……って、夏休みじゃあたりまえか。で、午後は……あ」

スケジュールを見てやっと思ひ出す。

「やっぱ！ 新入生の案内するのに、なんにも用意してない……!!」

## Episode:02

Rufair

「すごい、ここが……シエラ学院？」

圧倒されながら見上げる。

アヴァン国から船でユリアス国に入って、そのあと列車に乗り継いで、ケンディクに着いたのが三日前。そこで一回イマドと別れて、あたしはシエラのケンディク分校で、簡単なテストをいくつか受けた。

今朝はその結果が出て、本校への入学許可がおりたところだ。

でも次にどうすればいいのか分からなくて、困ってしまった。簡単に「港で連絡船に乗って」と言われても、その連絡船が分からなかったのだ。

イマドが迎えに来てくれなかったら、まだあたし、船にも乗れてなかったと思う。

「けっこう、大っきいだろ？」

「うん」

噂には聞いてたけど、ホントに島を丸ごとだ。切り立った崖の上が緑で覆われて、その中に石造りの建物と尖塔とが見える。

世界中にMeS Mercenary Schoolの略

と呼ばれる傭兵学校は、かなりの数が乱立してる。中には上流階級の子弟専用のMeSまで、あるくらいだ。

人気の理由は、ここの卒業生は徴兵が免除されるからだ。普通なら上級学校を出たあと兵役を果たし、それから大学や就職になる。けどMeSを卒業すれば同等の訓練は終わったとみなされて、その

まま大学や就職に進めた。

これが有利だと、M e S に子供を入れようとする親は多くて、結果として乱立に繋がっている。

ただこのシエラ学院の、中でも本校は別格だった。

「もつとも古い M e S」と称されるこの学院は、創立二百年。

起源はさらに遡って、ユリアス国がまだ、国内で領主同士争っていた時代になる。今のケンディクに所領を持っていた領主が、領内のゴロツキを集めて訓練し、傭兵としたのがその始まりだという。

その後本格的な訓練施設になり、成り行きで多くの孤児も送り込まれるようになった。ただ当時の環境は悲惨で、ここへ送られるくらいなら町でスリでもしてたほうがマシというほど、過酷だったらしい。

状況が大きく変わったのは、ユリアス国の統一時。首都イグニールに居を構える一族と、ケンディクに地盤を持つ一族とが講和条約を結び、縁戚関係を持つことで内戦の時代は終わった。

そのため例の訓練施設も不要になったのだけど、これに目をつけた人物が居た。シエラ学院の、初代院長だ。有力な貴族だけでなく慈善家で商才もあったその人は、この群島をまとめて買い取り、傭兵学校を開いた。

国中から孤児を集め、教育し、訓練し、時に在学のまま兵力として売り出す。卒業生はもれなく、軍なりへ就職の斡旋と称して売る。内戦の時代は終わったものの、各地で凶暴な竜族その他が暴れているのは相変わらずだったし、内戦に代わって国家間の小競り合いが始まったこともあって、この目論見は大当たりだったそうだ。

もちろん賛否両論だったけど、当時はまともな孤児院さえ少な

った。まして孤児がきちんとした教育を受けられる場所など他になく、文字通りシエラは孤児たちの、最後の頼みの綱になったのだという。

今は学院の分校がケンディクや首都のイグニールはもちろん、アヴァン国なんかにもあるし、金持ちのための「箔付け専用」分校まであるらしい。

「この本島に、寮と校舎あってさ。実地訓練なんかは別の島でやるんだぜ」

「そうなんだ……」

いちばん古いMesというからには、それなりだろうとは思っていたけど、予想以上に本格的らしい。

その間にも船はすべるように海を進んで、船着場へ着いた。意外と大きくて、幾つか高速艇まで停泊してる。

「気をつけるよ、時々落っこちるバカいっから」

「うん……」

揺れる足元に気をつけながら船を降りて、歩き出した。

切り立った崖の間の、坂道を登っていく。だんだん視界が開けてくる。



## Episode : 03

「きれい……」

曲線がいろどる、滑らかな肌の建物。東西南北と中央、合わせて五つの尖塔。

手前の庭や周りの木々もきれいに手入れがされていて、緑の間に花が咲いている。

石畳の道と、あちこちに置かれたベンチ。

あたしと同じくらいの子や、もっと上の人なんかがたくさんいて、すごく賑やかだった。

「……なんか、夢みたい」

ほんの何日か前まであたしがいた世界と、まったく雰囲気が違う。

「でも、夢じゃない……よね？ あたし、ここに行けるんだよね…

…？」

なんだか不安になって、イマドの方へ振り向いた。

「夢なわけねえって。」

おい、頼むからここで泣くんじゃねえぞ。おれが泣かしたと思われるかな」

「だいじょぶ……」

イマド、けっこう言うことがひどい。

そのまま歩いて、彼は玄関のところで受付の人に話しかけた。

「すみません、こいつ、ルーフェイア「グレイス」って言うんですけど。連絡来てますか？」

「おかえり、イマド。今年はいつもとより、早く帰ってきたんだね」

言いながら受付のおじさんが、何か紙をめくる。

「ルーフェイア……ああ、この子だね。

ちゃんと聞いているよ。このまま真っ直ぐ、学院長室へ行きなさい」  
予想と違って、あっさり通してもらえた。分校からきちんと、連絡が来てたらしい。

それにしても。

あたしが特殊な事情で本校へ入学すると、ちゃんと知らせが行ってたっていうのが不思議だ。本校の学院長経由だと分校の人は言ってたけど、よくそこへ話が行ったと思う。

まだアヴァンのほうは戦闘直後で混乱してたのに、母さん、どうやったんだろう？

「いいか、あの昇降台でいちばん上だからな、学院長室」  
「わかった。ありがと」

イマドと別れてひとりになった。  
明るい廊下。置かれた緑。笑いながら行き交う生徒たち。

あたし、ほんとにここにいて、いいんだろうか？

なんだかすごく、場違いなような気がしてくる。

あたしの知っている世界は 武器と魔法と、血。ものごころついた時から、戦場がすべてだった。

たしかにここは名だたるシエラ学院でMesだけど、それでも戦場とは違う。

もっとなんとなくと穏やかで……けど、あたしは……。

イマドに言われたとおり昇降台の前に立って、手をかざす。見たことがないほど旧式の造りで、とちゅうで浮力を失って落ちたりしないか、ちよつと心配だ。

開いた扉から乗り込んで最上階を表す石に手をかざすと、ガタンと揺れてから、昇降台は動き出した。

不安だった。

自分の両手をみつめる。

この手に太刀を握って、どのくらいになるだろう？

あたしは息をするくらい自然に、人を殺せる。そんなあたしが、ここで上手くやっていけるんだろうか？

けどそんなあたしに関係なく、昇降台は止まって扉が開いた。

豪華な絨緞が敷かれた廊下。がっしりした扉が、いくつも並んでいる。

「えつと……」

なんだか気圧されながら、案内板と扉の上の部屋名とを見比べて、院長室を探し出した。

そつとノックする。

「どうぞ、開いてますよ」

おそろおそろ重い扉を開けると、広くて大きな窓と、その前に立つ人影が目に入った。

「いらつしゃい」

なんだか優しそうなおじさんが声をかけてくる。

## Episode : 04

「わたしがここの学院長のオーバルです。

ルーフェイア「グレイス」シューマーですね？」

「フルネームは、やめてください」

さすがにこれは許容できなくて、即座に言い返す。シューマーの名は、簡単に口にできるようなものじゃない。

「……そうでしたね。カレアナからも言われていたのに、忘れていました」

カレアナというのは、母さんのファーストネームだ。どうやらここの学院長と母さん、ホントに知り合いだったらしい。

それならあたしの細かい事情も、たぶん母さん話してるんだろう。

それがいいのかどうかは、わからないけど。

そのあとサインだけして、入学手続きはあっさりと終わる。ほかにクラス分けのテストがあるらしいけど、年度途中の特例入学のせいで、後日改めてだそうだ。

ただ、そのあとの学院長の話が長かった。

「連絡をもらった時は驚きましたよ。なにしろ15年ぶりくらいでしたから」

「はあ……」

15年前なんて、あたしまだ生まれてない。

「まあカレアナはあまり、変わってないようでしたけどね。でも向こうは、まさかわたしがシエラの学院長をやっているなど思っても

見なかったようで、驚いてましたっけ」

「……そう、なんですか……」

たしかあたし、ここに入学手続きにきたような……？

「それにしても音沙汰のないうちに、こんな可愛いお嬢さんが生まれてたとは」

「……ありがとうございます」

なにをどう答えればいいか、分からなくなってくる。

「なんでも、カレアナがいろいろ言っていましたか……」

「！」

瞬間、驚くより早く、目に入った映像に対して身体が反応した。

とっさに小太刀を投げつけて隙を作り出し、逃さず一瞬で間合いを詰めた。そのまま間髪いれずに、学院長の右手首に手刀を叩きこむ。

学院長の手から、銃が落ちた。

「いたた……はは、さすがシュマーの総領家ですね。話は嘘ではなかったようです。驚かせてすみませんでした」

手首をさすりながら、学院長が笑って言った。

どうやら試されたらしい。

「あ、えつと、その……すみません。骨、だいじょうぶ……ですか？」

たぶん骨が碎けるほどの力が入ってないはずだけど……とっさだったから自信なかった。

もしかしたら、ヒビくらい入ったかもしれない。

「ええ、どうやら大丈夫のようです。」

それにしてもこれでは……今までいろいろ、辛かったでしょう？」

「え？」

言われた意味が分からず、そのまま考え込む。  
学院長がそつと手を伸ばして、あたしの頭を撫でた。

「もつと普通に、友だちと遊んだりしたかったでしょうに。  
でもこれからは、きつと出来ますよ」

「あ……」

涙がこみ上げる。

いちばん夢見ていたもの。

けどいちばん遠いと諦めていたもの。

それが今、目の前にあった。

次々と涙がこぼれる。

学院長が黙って、あたしを抱き寄せた。

「つつ……！」

動かしたせいだろう、手首を押さえて顔をしかめる学院長に、血  
の気が引く思いになる。

「だいじょうぶですか?!」

やっぱりヒビが、入ったかもしれない。

## Episode:05

「あの、学院長、どこかで……診てもらったほうが」

「そうですね。一応、診療所へ行つて、検査でもしてもらいますか」  
学院長の言葉に内心驚く。思つてた以上にこの学院、至れり尽くせりだ。まさか検査の出来る医療施設まで、あるとは思わなかった。

「ついでに寮まで案内しますよ。行きましょう」

「はい」

いっしょに昇降台で一階まで降りる。

廊下は変わらずにぎやかだった。

「夏季休業中で、正規授業はありませんからね。この時期は騒がしいですよ」

あたしの思いを察したのか、学院長がそんな説明をしてくれた。

「あ、院長だ！」

あたしと同じ年くらいの生徒たちが、集まってくる。

「うっわ、すげー美少女」

「なにになに？ 新人生？」

取り囲まれた。

「ねえ、どこから来たの？」

「え、あ、えつと……」

初めてのことに戸惑つてると、学院長が助け舟を出してくれた。

「ほらほら、困っていますよ。彼女はルーフェイア、これから学内を案内するところです。」

それよりあなたたち、そろそろ次の自主学習が始まる時間じゃあ

りませんか？」

「あ、ほんとだ」

「やばっ！」

わっと彼らが駆け出して、急に廊下が静かになる。

どうやらこの学校は普通と違って、夏休みでも「自主」と称して、ある程度授業が行われてるみたいだった。

そんな中を、学院長と並んで歩いてく。

「こちらが正面玄関ですね。おや、来るときに通った？ それは失礼しました。」

この棟は、事務関係が集中しているんですよ」

窓の外を指差しながら、いくつもある棟を、院長が順番に教えてくれる。

「あちらに、建物が幾つも並んでいるのが分かりますか？

いちばん奥の二つは、左が低学年、右が中学年の校舎です。手前の少し低い建物は、高学年の校舎。

あなたはまだ低学年ですから、奥の左側ですね」

どれも似たようなデザインの建物だから、最初のうちは間違えそうだ。

「ちなみに管理棟のすぐ後ろが、講堂と図書館です。あと陰になって見えませんが、食堂と診療所がありますよ」

言いながら学院長が、廊下を曲がった。

講堂と図書館の間を抜けるとたしかに説明どおり、小さめの建物が二つ見えてくる。ガラス張りのほうが食堂みだいだから、残りが診療所だろう。

その前で学院長が足を止める。



「ここからまっすぐ行つた、校舎の手前が寮です。

入り口のところに受付がありますから、細かいことはそこで訊いてみてくださいね」

「はい」

それから学院長は、痛そうに手首を押さえながら、診療所に入つていった。

何もないと、いいんだけど。

来た初日に学院長にケガをさせるなんて、きっとこの学校初だろう。あとで結果が出たところに、もう一回謝りに行つたほうがいいかもしれない。

そんなことを考えながら寮へ行こうとして、あたしは思いなおした。

食堂のほうに足を向ける。

まだお昼には早いけど、暑い上に学院長の話をずいぶん聞いてたから、喉が乾いてた。

人の出入りもあるし、行けばなにかあるはずだ。そう思って食堂のドアに手をかける。

でもなんか、妙に騒がしい。

それに、この気配……。

食堂の中から感じる独特の気配は、精霊を召喚する時のやつだ。

こんな狭いところで、呼び出すなんて。

常軌を逸してるってこのことだ。あんな威力があるものを部屋のなかで呼び出したら、よくて巻き込まれて大ケガ、ヘタすれば建物ごと吹き飛ぶ。

ともかく止めたほうがいいと思って、あたしは建物の中へ急いだ。



## Episode : 06

L o a s a i d

「ほんと、エレニアありがとね。どうにか間に合いそう」

「よかったわね。新入生がっかりさせたら可哀想なもの。」

「それで、同室なんでしょ？」

「うん、そーなんだよね」

昼食には早いものの、一仕事終えたロアとエレニアは、食堂でおしゃべりに興じていた。

「まさか、夏休み中に新入生が来るなんて、思わなくてさ。あーあ、これで独り部屋ともサヨナラかあ」

「ロアだったらよく言うわよ。もともと二人部屋なのに、部屋換えのたびに記録に細工して、うまってるように見せかけてたんじゃない」

「それ、言わないでっば」

新入生の世話は、同室の者の役割だ。そのため空きは年長者の相部屋から、順に埋まっていく。

だがロアは気楽な独りが好きで、新入生が来る春はいつもこっそり記録を書き換え、相部屋に誰も入らないようにしていたのだ。

とはいえずっと記録がそのままでは、怪しまれてしまう。そのためシーズンが過ぎると元に戻していたのだが、今回はそれがアダになった。

「それにしたって、珍しいよね。普通は最低でも春までは、分校にいるはずなのに」

「そうよねえ」

シエラ学院はもともとが特殊なうえ、本校は分校からの選りすぐりが集まっている。授業の進度も速いし、何よりある程度の訓練が

されていなければ、実地で即座に落ちこぼれた。

だからここへの直接入学はほとんどなく、年に一度、選抜試験を通り抜けた分校生が、春に入ってくるだけだった。

「まあ、よっぽどデキるんだろうけど」

それしか理由は考え付かない。

「そうだとしても、実技をどこで覚えたかよねえ」

エレニアの言うとおりだった。学科のほうはまだ分かる。世の中やたらと勉強が出来る人間は、一定数存在するものだ。

だが実技はそうはいかない。だいいち戦闘技術など、普通は身につける術さえない。

「少年兵上がりとかかなあ？」

「それも珍しい気がするけど」

実戦で鍛え上げられたなら、実技のデキの説明はつく。が、それだと今度は学課の説明がつかない。シエラの本校へ直接入れるほど戦闘慣れしているようでは、正規教育など受けていないはずだ。

「……よく分かんないね。まあ、会えば分かるか」

ここで考えても仕方ない。悩むのが苦手なロアは、そう結論付けた。

「それでその子、いつ引き取るの？」

「昼ごろってたかな。でもイザとなったら、連絡あるだろうし」

言いながらロアは、耳飾りに仕立てた通話石をいじる。

学院が生徒に無償で貸し出している通話石は、何かと便利だ。こういう場合に呼び出してもらえるし、いろいろ制限はあるものの一対一の直接通話も出来る。

そのほかこの石を使ったシステムは、映像の送信などにも応用され、いまや文明の根幹を成す技術になっている。

「名前は聞いたの？」

「いちおうルーフェイア・グレイスっていう女の子、までは聞いたんだけどね。でも、それだけ」

「ふうん、そうなの」

食堂の向こうのほうでは、なにやら食料の争奪戦が始まったようだが、二人は意に介さなかった。

食べ盛りが多い学院では、この手のコトは日常風景だ。時には魔法や武器を使つて、実戦さながらの奪い合いが起こることさえある。

「けどさ、いまさらチビの面倒見るなんて、思いつきりめんどくさくて。あーもうヤダヤダ」

「そうでもないわよ？ けっこう可愛いんだから。」

まあ確かに、その子の性格でかなり左右はされるけど      あ、外行かない？」

「そうしょっか」

二人はテーブルの上のトレイをそれぞれ手にとって、立ち上がった。

後ろのほうで「バカやめろ」とか、「早く逃げろ」などといった声が聞こえてくる。

## Episode:07

「まったく、昼食ごときで精霊呼びだすなんて」  
その時、見慣れない少女がすれ違った。

(うつわ……)

金髪碧眼、華奢な雰囲気、とびっきりの美少女だ。荒っぽいMesより、どこかのお嬢様学校の方が、よほど似合うだろう。

「ちょっとあなた、やめなさい。今入ったら巻き込まれるわよ」

エレニアが忠告したが、少女は気にしなかったようだ。無視して中へ入っていつてしまう。

「ねえロア、もしかして新入生って、あの子じゃないの？」

「そうかも」

あれだけの美少女だ。在校生なら間違いなく、噂になっているだろう。

「しょうがないなあ。ちょっと助けに行ってくる」

「あたしも行くわ」

今出てきたばかりの食堂へ、二人して戻る。

(えーと、あの子は……いた！)

少女はほとんど騒ぎの中心部まで、入り込んでしまっていた。

「だめだよっ！ 下がって!!」

だが美少女は動かない。

かすかに呪が聞こえた。

「荒れ狂う魔の流れよ、いまひとたび静寂のうちに、在るべき姿に戻れ……」

たしか効果が不安定なために使う者が少ない、無効化魔法だ。

「カーム・フィールド！」

ほんのわずかな間、周囲の魔法がすべて無効化される。

だが、それで十分だった。実体化したばかりの精霊が、出鼻をくじかれてふたたび霧散する。

（本校へ直接入学するのは、ダテじゃないってことか）

おとなしそうな見かけによらず、かなり場数を踏んでいるのは間違いない。だいいちそうでなければ、この状況でパニックも起こさずに召喚を阻止するのは無理だろう。

この無効化魔法、普通の魔法が対象なら間に合わない。気づいて唱えても、相手のほうが早く発動する。

が、精霊相手だと勝手が違う。実体化したあと改めて力を開放するため、上手くそのタイムラグを狙えば、強制的に非実体化させることが理論上は可能だ。

とはいえ、術者同士にかなりの実力差がなければ簡単に力負けするし、タイミングも慣れていなければ狙えないシビアなものだ。

それを金髪の美少女は、やすやすとやってのけた。つまり一瞬で相手との実力差を見抜き、確実にやれると判断したことになる。

「あの子、いったい何なのかしら？ どうみても普通じゃないわ」

「ボクに言われても。本人に聞いてよ」

「それもそうね……」

面倒見のいいエレニアが、美少女に声をかけた。

「あなた、大丈夫？」

「はい」

澄んだ泉を思わせる声だ。

「それならよかったわ。

それであなた　新入生のルーフェイア「グレイス？」

「はい、そうです」

どうやら最初の予想は当たったらしい。

「ロア、手間が省けたわね。

ルーフェイアは聞いているのかしら？　彼女　ロアがあなたと同

室よ」

「そう、なんですか？　えっと、先輩、よろしく……お願いします」

「……よろしく」

だが独り住まいに未練たらたらの彼女は、あまりいい顔をしない。

（　　ロア！）

エレニアが、ロアの脇腹を肘で突付いた。



## Episode : 08

(え?)

(だめよ!)

(あっ!)

少女の不安げな面持ち。これからどうなるのだろうか、半ばおびえているのが、その表情から読み取れた。

ふっと、昔母親を亡くした頃の自分が重なる。

この学院には孤児が多い。もしかすると、彼女もそうなのだろうか?

「えっと……ごめん、ちょっと考え事してたから。とりあえず部屋まで行こうか? 荷物、あるよね?」

「あ、はい」

やっと少女の顔から怯えが消える。

思わずほっとした。それほど落ちこんでいるわけではないようだ。

「そしたらロア、私は図書館寄ってくから」

「あ、そう? じゃあまた後でね」

食堂を出たところでエレニアと分かれ、ロアは少女と二人になった。

こうして見てみると、なおさらその美少女ぶりが際立つ。明日あたり 下手をすれば今日中か には、男子生徒の間でウワサになること請け合いだろう。

事実こうして歩いているだけで、すれ違う生徒のほとんどが振り返っていくのだ。

（世の中、絶対不公平だよな）  
思わずひがみたくなる。

これだけの容姿に、この学院へ直接入学できるほどの能力と学力。およそ普通の人間が欲しがるものは、ぜんぶ持っていると言っている。

だがルーフェイアのほうは、あまりそう思っていないようだった。

「あの……先輩、なんかみんな、こっち見るんですけど……？ あたしどこか……変ですか？」

「あのねえ」

最初はいやみかと思ったのだが、どうやら本気らしい。

「キミが可愛いから、注目されてるんだってば」

「……え？」

ロアの言葉を聞いて、少女はきよとした表情で、考え込んでしまった。何を言われたのか、理解できないようだ。

「あきれた！ 言われたことないの？」

「ない……です。強い、はよく、言われましたけど……」  
思わず頭を抱えなくなる。

この美少女、いったいどういう生活をしてきたのか、この手の常識は全く知らないようだ。

とんでもない後輩を押し付けられた気がする。

（まったくこの年で……って、あれ？）

そういえば、少女の年齢さえも知らなかった。

「あのさ、キミ幾つ？」

「十歳、です……」

それにしては小柄だ。

だがロアは、そんなことを思う暇がなかった。

十歳。

妹が生きていれば、ちょうどこの歳だ。

げんきんなもので、急に少女がいとおしくなる。

「そっか。それでひとりでここへ来たんじゃない、心細かったね」

「心細いつていうか……あたし、学校とか……初めてで……」

「え、学校行つてなかったんだ」

だとするとやはり、戦場育ちだろうか？ 少年兵として前線に出  
ていたなら、さっきの食堂での行動も納得がいく。

これだと学科でパスしたのが不思議だが、おそらくはもともと頭  
のいい子なのだろう。戦地で生き残るためにはそれなりの知識が必  
要だし、インテリ崩れの兵士からいろいろ学んだ可能性もある。

何かが心の片隅に引っかけた気はしたが、ロアはそれ以上考え  
なかった。

「そっか、それだと心配だね。でも大丈夫だよ、きっと。うん、大  
丈夫」

死んだ妹と同年と知って、すっかりお姉さんモードだ。先刻ま  
での嫌がっていた様子はどこへやら、根拠のない自信で少女を励ま  
している。

## Episode:09

「ところでお昼は済んでる？　もしまだなら、荷物置いてから食べに行こうか？」

「あ、えつと、あの、途中で……少し、食べたので……」

少女の方も、ロアのお姉さんぶりに安心したようだ。笑顔が多くなってきた。

「おっけーおっけー、そしたらまず荷物もらって　すみませーん！」

寮の入り口で寮監を呼び、少女の荷物を受け取る。

「つて……これだけ？」

「はい」

彼女宛てに送られてきていた荷物は、簡単に持ち上げられる大きさのケースがひとつ、それだけだった。確かに孤児院などから学院へ来た場合、荷物が少ないのがほとんどだが、これはその中でも少ない部類に入るだろう。

それなのにぜんぶ届いてよかったと言わんばかりの少女の表情に、なぜかこちらが切なくなる。

（まあ、ボクも少なかったけどさ……）

たった独り戦場に残されたあと、運良く保護されてここへ来た口アは、ほとんど荷物らしいものはなかった。

少女の両親や家族がどうしたのか聞いてみたかったが、それを踏みとどまる。もし自分のような目に遭っているのなら、聞くのは酷いものだ。

わざと知らぬふり、明るい顔をして荷物を運び込む。

「これなら整理は簡単だから、手伝わなくてもいいね？　そのへんのキャビネットとか、空いてるのは勝手に使って大丈夫だから」

「はい」

「よし、いい返事。じゃあ後は……施設の案内、かな？　教材はまだだろうし。」

「どうする、今から行こうか？」

荷物を整理しなくて済むぶん、時間が空いてしまっている。

「あ、はい。お願いします」

少女は素直にうなずいた。こうなると見かけとあいまって、可愛さが倍増する。

いつしかロアは、ルーフェイアを自分の妹のように思い始めていた。

「よし、じゃあ行こう」

少女を従えて部屋を出る。

「向かい側が男子寮は聞いた？」

ロアが問いかけると、金髪の後輩はこっくりとうなずいた。

「夜とか、間違えちゃダメだよ。何されるか分かんないからね」

「あ、はい……」

まだそういうことはよく分かっていなそうだが、いちおう釘を刺す。これだけの美少女だ。何か起こってからでは遅い。

そのまま並んで寮を出た。

「食堂は……分かるもんね。向かいが診療所。え？　知ってるんだ？」

まだ行ったワケもないのにとよく訊くと、ここへ来てすぐひと騒動起こしたという。

「最速記録だろうなあ、それ」

こういう学院だからけっこう荒事も多く、生徒や教官がケガをすることは確かにあるが、「入学のサイン直後に学院長に怪我をさせた」というのは、さすがに言い伝えられていない。

「すみません……」

「あ、気にしない気にしない。銃口なんか向けた学院長が、悪いんだし」

この場合はどうみても、自業自得だろう。

「それにしても学院長、銃なんて使ってた。あんな古臭い武器、ここじゃたいして役にたたないのに」

魔法を効率よく物に付与させる方法が見つかって以来、技術は日進月歩だ。武器も当然　というより真っ先にその洗礼を受け、旧来の飛び道具はたちまち時代遅れになってしまった。

見かけは軽装でも、戦闘行為に携わるものはいまはみんな、魔法の防壁を身にまとっている。これを破って相手に傷を負わせるには、魔力の込められた武器が必要だ。

だが手に持って使うタイプの武器と違い、飛び道具は術者の手を離れるため、持っている魔力が弱い。そのため防壁を破れず、食い止められるケースが多かった。

この結果、武器の主力は再び、近接武器に戻ってきている。

## Episode:10

「ルーフエアも、銃なんて無視しちゃって良かったのに」

「でも、もし新型弾だったら、困りますから……」

そういえばそんな話は、ロアも最近聞いていた。なんでも弾丸に新型の魔力石を使うことで、今までの数倍の魔力を持たせることができるらしい。まだテスト段階だが、もしこれが実用化されれば、戦法がまた大きく変わるような代物だ。

ルーフエアはその点も考慮して、身の安全のために叩き落したのだらう。学院長もイタズラのつもりが、ずいぶん高くついたものだ。

続いて並びの、大きな建物の前へ来る。

「あっちが講堂で、こっちが図書館」

図書館さ、けっこう本多いんだよ。でもテスト前とかけっこう混むから、早めに借らないとダメ」

そんなことを言いながら歩き回り、最後に尖塔のひとつへ上がった。

「ここは西塔」

えーっと、見えるかな？ 校舎の裏庭が校庭兼ねてて、普段の訓練はそこでやるんだよ」

下を見せながら説明する。

「あの、あっちの塀は……？」

少女が校庭の奥の、がっちりした高い塀を指差した。

「ん？ ああ、あれはホントの訓練所」

「……………」

なぜかやけに嬉しそうだ。

「あのねえ、訓練って言ってもホンモノの魔獣、放ってあるんだから。そんな浮かれてると、エライ目に遭うよ」

「え、でも、魔獣だけ……なんですよね？」

それならどうという事はない、そんな表情だ。

（うーん、なんか自信過剰みたいだけど……でもたしかに、食堂でのこともあるしなあ。

どっちにしてもいっぺん、連れてったほうがいいかな？）

もし一人で入り込んで、なにかあつては大変だ。

「そんなに言うなら、行ってみる？」

「はい」

答えながらルーフィアは、ずっと持っていた包みをほどいた。中から出てきたのは、一振りの見事な太刀。

「まさかそれ、キミの得物？」

「はい。両親が、これ……持ってたって」

（……あれ？ この子って孤児じゃなかったんだ）

少女の言葉に、ロアは自分が完全に勘違いしていたことに気づく。

だがよく考えてみれば、ルーフィアは一言も、そんなことを言っていない。こっちが思いこんでいただけだ。

もちろん少女のほうはロアのそんな思いを知るはずもなく、慣れた調子で太刀を腰に下げている。

見かけに比べて重量があるはずだが、よろめきもしない。かなり使いなれているようだ。

いまひとつ狐につままれたような気がしながらも、ロアは少女と



共に訓練所まで来た。

弱いとは言え魔獣が野放しになっているここは、ルーフェイアたち低学年は原則出入り禁止だ。それどころかその上の中学年でも、それなりの資格を何か取らなければ、一人での出入りは認められない。

当然低学年連れのロアは入り口で呼び止められたが、理由を話すと許可が出た。

ここへ入学した低学年が、興味本位で訓練所に入り込むのを防ぐため、あえて最初に怖い思いをさせる。これ自体は、よく行われているのだ。

ゲートの隣の、詰め所のドアが開けられた。普段の出入りは、この詰め所を通らないといけない。万一の事態に備えてのものだ。

「いい？ この奥だからね」

殺風景な詰め所を抜け、反対側のドアの前で立ち止まる。ここから奥は弱肉強食、弱いとは言え魔獣の世界だ。

## Episode : 11

外の気配を探る。不意打ちだけは食らいたくない。

「あの、先輩、平気です……よ?」

だがルーフェアは、無造作と言っているほどの調子でドアを開け、中へ入って行ってしまった。

まったく緊張感がない。

「ちょ、ちよつと待ちなよ!」

慌てて後を追う。もし彼女に何かあれば、ロアも減点されるのだ。

「魔獣って……でもあんまり、強そうな気配……ないですね」

「後ろっ!」

のんびりしているルーフェアに、ここに放し飼いにしている植物型の魔獣 足と歯が生えた雑草風味 の触手が迫っている。

だが彼女は、悠然と首をめぐらしたただだった。

凄惨な笑みが、その顔に浮かぶ。

「 フレイム・ロンド!」

火炎系の下級呪文だ。花びらのように炎が舞い散り、魔獣が慌てて触手を引っ込めた。

「破っ!」

さらにルーフェアの裂帛の気合。ばらばらと触手が切り落とされる。

ぎい い い い

魔獣が耳障りな声を上げるが、少女は意に介さない。

ざっ、と音を立てて踏みこむと太刀を振りかぶり、躊躇うことな

く突っ込む。

（　速い！）

そのまま全体重を乗せて、彼女は刃を振り下ろした。

一刀両断。

魔獣が叫びをあげる間もなく二つに分かたれ、さらに切り刻まれて絶命する。

（なっ、なにこの子……！）

十歳の少女がまるで傭兵隊並み　いや、それ以上だ。

「先輩、ここの魔獣って……これだけ、ですか？」

度肝を抜かれたロアに対し、少女のほうは平然としている。

「え？　あー他にも何種類がいるけど、だいたいコイツと同じような？　　なんですか小竜族が少しいるけど、あれはさすがにヤバいし」

「……」

すてきなオモチャをみつけた、そんなルーフェイアの表情に、背筋を冷たいものが走る。ここで止めなければぜったい、喜んで退治に行くはずだ。

「と、ともかく訓練はまた今度！　まだいろいろあるんだし」

名残惜しげなルーフェイアを、強引に引っ張っていく。これで見かけは華奢な美少女なのだから、始末に追えない。

（　　いったい、どういうコなんだか？）

食堂の召喚騒ぎのときもそうだったが、やはり並みの少女ではなさそうだ。

かといって訊くのもためらわれ、腑に落ちないままロアは、最初に出会った食堂まで戻ってきた。

「せっかくだから、なんか食べよ。中途半端だけど、おやつならちようどいいしさ」

後輩を連れて中へ入る。

もう昼下がりといった時間だが、小腹が空いて軽く食べようというのだから、食堂は意外と混んでいた。

「ルーフェイアは何食べる？」

「え？ えっと、ええと……」

あの戦闘時の切れ味はどこへやら、少女はその場で考え込む。自分の決めながら、ロアはのんびりと待った。概してこういうものは、時間がかかるものだ。

だが。

「ルーフェイア、あのさ、キミこれが何か分かってる？」

「食べ物……ですね？」

何か様子が違うと問いかけたロアに、案の定というべきか、激しく的外れな答えが返ってきた。

## Episode:12

「食堂で食べられないもの、置くわけないじゃん……。ほら、これとかどうかな？」

「これ……ケーキ、ですよ？ 何でこんなに、種類……あるんでしょう？」

何かもう、次元そのものが間違っているらしい。

「まさかさ、食べたことないの？」

「えっと、あります。白いのとか……あと、黒いのも」

その場で貧血を起こさずに済んでよかった、そうロアは心底思った。

シエラ学院はワケありの生徒が多く、稀に少年兵上がりまでいるため、たしかに一般常識からズレている者はいる。  
いるのだが……。

「ここまで本気で何も知らないって、初めて見たなあ」

「すみません……」

視線を落として謝る姿は可愛いが、この子の知識や能力は、問題になるレベルで偏っているようだった。

「とりあえず、ボクが選ぶよ。えーっと、あんまり甘くないほうがいい？ じゃあこれかな」

放っておいたら日が暮れるまで迷っていきそうで、適当に選んでやる。

「ほら、そこ席空いてるから、座って座って。ボクがこれ持つからさ」

任せるのは不安すぎて、ロアはトレイを自分で持ち、少女を先に

行かせた。ちょこん、と座った目の前に、ケーキと飲み物とを置いてやる。

「きれい……」

フルーツ類が宝石のように飾り付けられているのを見て、ルーフエアがうつとりと言う。

「本土からちゃんと、本職来てるからね」

もうだいぶくたびれたお爺ちゃんなのだが、腕は確かだ。ケンデイクの店は子供に譲って、自分は孤児を喜ばせてやろうと、ボランティア同然でここで働いてくれている。

ひと口食べると、少女の顔がほころんだ。

「……おいしい」

「あはは、お爺ちゃん聞いたら喜ぶよ」

食べて喜ぶ姿がいちばんのお礼、それがお爺ちゃんの口癖だ。

おいしそうに食べるルーフエアを見ながら、ロアもお気に入り、を口に運んだ。

「そいえばたしか、クラス分けのテストとか、あつたと思うんだけどさ。どだった？」

食べながら、思い出して訊ねる。

この学院は毎年春になると、前年の成績でクラスが分けなおされる。そして新生はあらかじめ、分校で編成用の試験を受けてくるはずだ。

いまは春ではないが、試験が免除になるとは思えなかった。

「えっと、本校入学の試験は、受けました。」

あと学院長が、クラス分けの試験……たしか、あとで……」

「うつわ、それヒドっ。一回やってんだから、それ使えばいいのに」  
テストなんていうオソロシイものを何度も受けるなど、考えるだ

けでも気が滅入る。

「なんか、時期が半端で、分校のテストじゃダメって……」  
「あー、そゆことか」

時期も時期なうえ、分校を飛び越えての特例入学だからだろう。万が一レベルの違いすぎるクラスに入ったりしたら当人とクラスメイトの双方が不幸だ。

そのために万全を期しての再テストなのだろうが、やはり気の毒だった。

「んじゃさ、教えてあげよっか？　少しでもやっとならば、なんか違うかもだし」

「いいん……ですか？」

「もちろん！」

ロアとて自学年のAクラスだ。四つも年下の勉強をみるくらいなら、どうということはない。

「このあとどうせ時間あるから、部屋帰ったらおさらいでもしよ」  
「はい」

「よし決まり、んじゃまずは腹ごしらえ！」  
よく分からないこじつけをして、ロアはケーキのおかわりをしに立ち上がった。

## Episode : 13

学院の夜は静かだ。

特に消灯時間を過ぎると各施設が閉鎖されるため、廊下を歩く足音でさえかなり響いてしまう。

だがロアは、例によってまだ起きていた。

消灯時間といっても、室内までは管理されていない。テストの前などは、徹夜組も多いのだ。

ルーフェイアの寝室のドアが閉まっているのを確認し、共用スペースの明かりを点け、そつと端末の前に座った。

魔法の遠見水晶から発達した魔視鏡と、通話石を利用した通信技術。魔法を込める魔石から作り出された、さまざまなものを記録できる記録石。魔法をコントロールする補助具として、もっともポピュラーな杖。

どれも単体では昔から使われてきたものだが、それらを組み合わせる技術が生み出されたとき、状況は一変した。

記録石と魔視鏡が組み合わせられ、誰でも簡単に記録を再生出来るようになった。

次に魔視鏡と通信石が組み合わせられ、映像配信が実現した。

さらに高位通話石が発明され、独立していた多数の通話石を束ね、大規模な通信網ができた。

加えて記録石に映像や音声だけではなく、「さまざまな動作」も記録されるようになった。

それをコントロールするために、簡単に発動できるよう設定された専用の小さな魔法の杖が作られ、細かい指示が可能な操作盤へと進化した。



そうして出来上がったものは……通話石の設定さえ出来れば世界中どこでもつながり、接続している端末の記録を閲覧できる、誰も予想しなかったような道具だ。

もちろん完全になんでも閲覧できるわけではなく、ある程度の制限はされている。だがそれを差し引いても公開されている情報は膨大だし、何より今までは知り合うことのなかった相手と、直接話せるのだ。

海と魔獣によって分断されていた世界は、いま草の根レベルで急速に距離を縮めている。

物理的政治的には隔絶されながら、互いに近づく世界。これが何を生むのか、誰にも分からない状況だ。

もともとロアにしてみれば、そんなことはどうでも良かった。自分にとって極めて有用な道具、それだけのことだ。

眠っている後輩に気づかれないうつ、細心の注意を払って端末を立ち上げる。昨日までは独りだったのでけっこうおっぴらにやっていたが、これからはそうもいかないだろう。

まず今までいちいち入力していたものを、一挙動で切り替わり、通信網から安全に離れるよう細工した。

さらに通常モードからの切り替えを、今まで以上に複雑な手順にし、本人確認のステップも付ける。こうしておけば万が一ルーフエィアがこの端末を触っても、なにも起こらないはずだ。

そして、アクセスを開始する。

通信網に忍び込み、情報を喰らうモノ。  
それがロアの夜の顔だった。



## Episode:14

もつとも彼女は、記録の破壊や改竄はしない。その必要はなかった。

(今日こそ……)

見つけてやる、そう思いながら操作盤を叩く。

彼女にはずっと探し続けているモノがあった。だがもとのネタが「存在はするが詳細は一切不明」という物のため、どこをどう探しても見つからない。

普通の手順で当たれる記録は片っ端から調べ、それでも見つからず、ついにロアは不正アクセスに手を出したのだ。

だがそれでも、手にした情報は断片的なものばかりだった。

(つたく、四年もやって見つからないとか、ハンパじゃないよね)  
そう思いながら手元の写真を見る。

自分と、妹と、父と、母。

家族で撮った最後の写真だ。

あの戦場と化した街から逃げる直前、母が焼き増しして防水加工しておいたものをロアに持たせたため、手元に残った。

これと、妹が忘れかけたのを持って出た、魔石のはまったお守り。たったこれだけが、ロアに残された家族の思い出だ。

(きっと……見つけるから)

父は写真を撮った直後に紛争へ駆り出されて戦死、その1ヶ月後には母と妹も死んでいる。

だがよほど強運だったのか　それとも運がなかったのか　と

もかくロアは独り生き残り、戦場をさまよっているところを自国の兵士に保護され、巡り巡ってシエラ学院へ送られた。

それからずっと探している。

自分から家族を奪ったものを。

保護されたその晩、やっとありついたベッドの中で、ロアは兵士たちの会話を聞いた。

「ひでえよな。あんな小さな子がひとりで戦場さまよってたんだぜ？」

「ああ。よく生き残ったもんだよ、可哀相に」

「ウワサじゃ、シュマーの連中が向こうに付いたらしい」

「マジかよ。あいつらがそんなことさえしなきゃ、こんな泥沼にならないうちに終わったのによ」

「ホントホント、そうすりゃあの子だって、あんな目に遭わずにすんだよな」

そうしてロアは、復讐の対象を知ったのだ。

その後学院へ来てからは、「シュマー」に関するありとあらゆる情報を集めた。

だが禁じ手の不正行為にまで手を出したというのに、分かったのは「そういう傭兵一族がいる」ということと、「その一家の子弟が戦場で育てられる」ということだけだ。

どこの誰がそうなのかも、いったい今どこにいるのかも、全くわからない。

（でも必ず、見つけてやる）

復讐するために。自分の家族を奪った償いをさせるために。

鬼気迫る表情で、ロアはキーを叩き続ける。



## Episode : 15

R u f e i r

「そこまで」

鋭い声で、はっと我に返った。

「出来たかね？」

「あ、はい」

慌てて答案用紙を渡すと、教官の顔色が一瞬変わる。朝から連続で試験を受けて、疲れて半分うとうとしていたのが、いけなかったのかもしれない。

ぜんぶ答えは書いたから、だいじょうぶのはずだけど……。

「きみはたしか……五学年だったね」

「えっと、そう、聞きました」

本当のことを言うと、自分でもよく分からない。ただ先輩や学院長が、そう言ってたはずだ。

「うーん、五学年ねえ。それならなんで、この解法を知っているんだ？　そもそも今まで正規教育を受けていないのに、これだけというのは……」

教官、何かぶつぶつ言っている。

「あの……？」

どうしていいか分からなくて、おそろおそろ声をかけてみた。

「ん？　ああ、今日はこれで終わりだから、部屋へ戻ってかまわんよ」

「はい」

荷物を持って立ち上がる。

「明日は実技だから、指定の時間に指定場所へ来なさい。遅れないように」

「はい」

立ち上がった身体を伸ばす。座りっぱなしなんて初めてで、身体じゅうが重い感じた。学院に来る前の分校でもテストを受けたけど、何日かに分けて少しづつだったから、こんなことはなかった。

本来は何のためなのかよく分からない、小さな部屋を出る。

「どうだった？」

外でロア先輩が、待っていてくれた。

「えっと……身体、痛いです……」

「そう来るかー！」

あたしの言葉に、先輩が笑い出す。何がそんなにおかしかったのか、お腹を抱えての爆笑だ。

「先輩……？」

「あーゴメンゴメン。えつとき、身体じゃなくて、試験ちゃんときた？ 難しくなかった？」

そういう意味だったのかと、やっと理解する。

「いちおう……ぜんぶ答え、書きました。でも思ったより、難しくなかった……かな」

「やっぱそうかあ」

思ったとおり、そんな表情でロア先輩がうんうんとうなづく。

「教えててびつくりしたもん、頭よくて」

「そう、なんですか？」

あたしいつも、母さんたちに笑われてたのに。

「そそ、自信持っちゃってダイジョブダイジョブ。でき、なんか食べる？ 疲れたでしょ」

言いながら先輩、あたしを食堂のほうへ引っ張ってく。答えがN  
Oってケースは、考えてないみたいだ。

もしかするとあたしはただの口実で、何か食べるのが目的なのか  
もしれない。先輩は昨日もケーキをおかわりしてたし、そのあとの  
夕食もちゃんと食べていた。だからきつと先輩、食べるのが好きな  
んだろう。



## Episode:16

昨日と同じようにケーキを選んでもらって、空いている席に座ると、向こうのほうにイマドがいるのに気がついた。いっしょに居るのは友だちだろう。

向こうも気がついたみたいで、視線が合う。ちょっと嬉しくなつて、小さく手を振った。

とたんにイマドが、両脇の友だちから殴られる。

あたしの、せい？

ほかに考えられなかった。あたしみたいな、普通の生活を知らないような人間が、親しげにしたりするから……。

涙がこぼれそうになって、下を向いてくちびるを噛む。

「わわわ、ルーフェイアどしたの？ どつか痛くした？」

先輩が慌ててるのを見て、泣くのをやめようとしたけど、逆効果だった。よけいに涙があふれて、止まらなくなる。

イマドに会ってからあたし、どうもダメだ。前からすぐ泣いて、どうにかしなきゃと思ってたけど、なんだかひどくなった気がする。

「ほんとにキミ平気？ 部屋帰って休む？」

「あー先輩、コイツ泣き出すと当分ダメですから」

聞き覚えのある声に、思わず顔を上げる。

「イマド……？」

いっしょにいた二人の首根っこをつかんだ彼が、目に前に居た。こともあろうに二人を引きずりながら、ここまで来たらしい。

「オイコラ何しやがる、放せっての！」

「つかイマド、いつもとキャラ変わってるって！」

友だちらしい二人が、口々に文句を言う。  
なんだかよく分からないけど、やっぱりあたしが原因で、騒ぎになってるみたいだ。

「あの、あたしのせいで……ごめんね……」

申し訳なくて、引きずられてきた二人に謝る。

「あ、違うから！ そのさ、悪いの俺らだから！」

友だちの片方が、あたしに向かって謝った。

「てかおまえなあ、なんだっていきなり泣くんだったの」

「ごめん……」

こんどはイマドに謝ったあたしの前で、なぜか彼の頭が、ごちんと音を立てて殴られる。

「キミねえ、何しにここまで来たか知らないけど、この子泣かせたらボクが承知しないよ！」

ロア先輩、すごい剣幕だ。

「あの、先輩、違うんです！」

殺気のようなものを感じて、慌てて止める。

「けどさ、こいつらが何かしたから、ルーフェイアが泣いたんだよ」  
つまりはあたしのせいで、よけいにややこしくなったらしい。

「あの、イマドたち、関係なくて……その、すみません……」

上手く説明できなくて、だんだん声が小さくなってしまつて、情けなくてまた涙がこぼれた。

「あ、先輩も泣かした」

「ちよつと、ボクは別に！」

何かなんだか分からなくなってくる。

## Episode : 17

どうしていいか分からず、それでも泣くのはやめようと必死に涙をぬぐっていると、イマドが苦笑しながら話した。

「先輩、こいつここ来る前、けっこーいろいろヤバかったんですよ。んでその反動で、すぐ泣いちゃって」

「ありゃ、そうだったんだ」

この程度の説明なのに、意外なくらいあっさりと先輩が納得する。

「学院来てほつとして、そうなる子けっこういるもんね。

ルーフェイアも大変だったねえ、でもここならもう、だいじょぶだからさ」

言いながら先輩、あたしの頭を小さい子みたいに、がしがと撫でた。

「まあコイツの場合、最初っからそうとう泣き虫ですけどね」

「イマド、ひどい……」

何もそんなこと、ここで大きな声で言わなくなっちゃっていいのに。

先輩なんてそれ聞いて、また笑い転げてる。

「俺さ、ヴィオレイ。名前なんての？ もうクラス決まったんだ？」

「おい、なに抜け駆けしてんだ！」

こっちはこっちでお構いなした。

でも……なんだかちよつと、楽しい。

「ほらキミたち、ルーフェイアおどかさない。あとこの子のクラス、まだ決まってないよ。いまクラス分けのテスト、受けてるところだから。」

Aクラスだと思っけどね」

なぜか自信たっぷり、ロア先輩が言う。

「そうそう、それでこれから、この子連れて訓練でもしようかと思  
ってたんだよね。だから、キミたちも来なさい」

「え、マジっすか？」

さすがにこれにはびっくりしたみたいで、イマドたち三人が目を  
ぱちくりさせる。

「大マジだよ。てかね、キミたちだってこの子、同じクラスのほう  
がいいんでしょ？ なら、協力してあたりまえだし」

反対意見はすべて却下、そんな威圧感で先輩が言い放った。

「おれ、欲しい限定販売あったのに……今日発売なんだぜ……」

「そこ黙る！」

見ているだけで楽しいやりとり。いつの間にか泣くのをやめて、  
笑っている自分に気づく。

あたしが夢見ていた世界が、いま目の前にあった。

## Episode : 18

その晩、あたしはベッドの中で寝返りばかりうつっていた。  
学院の夜は、とても静かだ。

ここはなんの音もしない。銃撃の音も、砲撃の音もしない。

静かすぎて眠れなかった。

これが、平和なのかな？

こんな穏やかさ、とても信じられない。

逆に言えばそれだけ、常に気を張っていたんだろう。でもそれは  
当たり前だったし、何より生き残るにはぜったい必要なものだった。

そつと起き上がる。

柔らかいベッド。清潔な部屋。どれもあたしにとっては、馴染み  
が少ないものばかりだ。

なんとなく不安になって、枕元に置いておいた太刀を手にする。

これだけは変わらなかった。

柄を握っていると、いろんなことが脳裏をよぎる。

炸裂する砲弾。えぐられていく大地。引き裂かれて死んでいく兵  
士たち……。

でもなぜだろう？

あの地獄の風景が、呼んでいるような気がする。

無念の死を遂げた亡霊たちが、囁いてる。

ここへ帰れ、と。

でももう、あたしはイヤだった。ほんの少しでいいから、血の臭  
いから離れたかった。

それなのに亡霊たちは追いかけてきて、囁き続ける。

ここへ帰れ、と。

あたしは頭を振ると、立ちあがった。

確かにいつかは帰るだろう。それが約束だから。

けど、今だけは……。

もう寝つけそうになくて、寝室のドアに手をかけた。共用スペースの端末を使えば、なにか適当に暇を潰せるだろう。

そして、気が付く。

こんな遅い時間なのに、共用スペースからかすかに物音がしてた。魔視鏡の共鳴音。それに、操作盤を叩く音。どうも、先輩も起きてるらしい。

驚かさないようにと思って、あたしはそつとドアを開けた。

先輩が端末に向かって、何かしてる。

なんだかすごく真剣な感じで声をかけられなくて、そのまま魔視鏡に映るものを、あたしは後ろから眺めていた。

なんだろう、これ。

ふだん目にする映像とかじゃなくて、何か文字ばかりだ。それが先輩が操作するたび、すごい勢いで流れていく。

しばらく見ているうちに、やっと幾つか見知った単語があることに気がついた。これならたぶん……記録石の中のデータ一覧だ。

けど、自分のをこんなふうにして見るのは、聞いたことがなかった。だいいちこんな変わったことをしなくても、簡単な操作で詳しく見られる。

だとしたら、何を？

しばらく考えて、あたしは思い当たった。



## Episode:19

### Loa side

その晩もロアは、いつもと同じように「それ」を探していた。次から次へと関係ありそうな場所へ侵入し、検索し、情報を漁る。万一何か引つかかれば、それがたとえ噂話でも、詳細に探っていく。だがそのどれもがほんとうに「単なる噂話」で、憶測の域を出ないものだった。

（ダメなのかな……）

つい、気弱が頭をもたげる。

年単位で、しかもかなりの危険を冒して探しているのに、いまだに証拠のカケラも見つからないのだ。

火のないところに煙は立たない。ならばこれだけまことしやかに囁かれているのだから、必ずあるはず。

そう思っ探し続けてきたが、もしかすると自分が追いかけているのは、実体のない都市伝説だったのかもしれない。そんな気がしてくる。

だとしたらどうするか、そんなことを考えた瞬間。

「あの、先輩、それ……」

「……！」

不意に後ろから声をかけられて、ロアは死ぬほど驚いた。だがとっさに画面だけは切り替える。

うすうす感じてはいたが、それ以上に恐ろしい少女だったようだ。ドアを開ける音もなければ、近づいた気配もなかった。

心底焦りながら振り返る。



見ればルーフェイア自身は、別にわざとではないらしい。どういう育ちかたをしたのか、これが当たり前のようだ。

ただ少女の口から出たのは、それ以上に予想外の言葉だった。

「あ……もっと……」

「え？」

意味が飲み込めずに一瞬考え込む。

もっとと言うからには、何かをさらにと言うわけで、その「何か」が何かと言うと……。

自分でもよく分からない思考ルートを、それでも大急ぎで二周ほどして、ロアは結論にたどり着いた。

「こういうの、好きなんだ？」

さすがに怖いので、「何が」とは訊かない。

「えっと、あの、不法アクセス……ですよね？」

「うん」

そこまで分かっているならと、ロアはあっさり認める。

「やってたんだ？」

「いえ、初めて、見ました……」

これは意外だった。

基本的にこういうものは映像と違って、見てすぐ分かるものではない。それなりの知識が要る。なのに初めて見てそれに思い当たるとは、けっこうカンも鋭いようだ。

「それでよく分かったなあ。あ、そうそう、これナイショにしといてね」

ルーフェイアはそのあたりでほいほい喋るタイプではないが、いちおう釘を刺す。

学院では諜報活動教育の一環で、この手の不正侵入や防御も教えている。だが実際にやっていいのは、任務や授業の中だけだ。個人で勝手にやっているのを見つかったら、もちろん怒られる。

ただ腕に覚えのある学院生ともなると、監視を簡単にかいくぐつてしまい、いたちごっこだ。しかもそれが、ハイレベルな諜報員を生み出す要素のひとつにもなっているのだから、皮肉な話だった。

「さ、もう遅いし寝なくちゃね」

ロアは魔視鏡をオフにして立ち上がった。自分ひとりならともかく、こんな遅くまで、まだ小さい後輩を起こしておくわけにはいかない。

だがいつも素直な後輩が、珍しく不満そうだ。諦めきれないようすで、ロアの端末を見ている。

## Episode : 20

ロアは考える。どちらにしても見つかってしまったのだ。この子はこれからも、毎晩覗こうとするに違いない。

ならばいつそきちんと時間を取って教えてやって、終わってこの子を部屋へ戻してから自分のことをするほうが、問題が少ないのではないだろうか？

「そしたらさ、教えてあげようか？」

「え?! あ、いいん……ですか？」

後輩の表情が、驚きと喜びへと変わる。

「うん、かまわないよ」

どうせこの手のことは、授業を受けるようになればイヤでも覚えるのだ。それなら今から教えても、大差ないだろう。

「でも、ぜったい他の人にはナイショだからね。部屋でやってるとか、教官に知れたらヤバすぎだし」

「あ、はい」

何も知らない後輩を巻き込んだ気がして、少々うしろめたかったが、これで一安心だ。自分もやっているとなれば口外しないだろうし、「今日はここまで」と言えばこの子なら、素直にベッドに戻るだろう。

「じゃあ、明日から。今日はもう寝ないと」

「はい」

ドアを開けてやって、少女を部屋へ戻す。だがそのうしろ姿が、妙に寂しそうだ。

「どしたの? だいじょぶ?」

声をかけてやると、小さく首を振った。

「しょうがないなあ」

本人はだいじょうぶと言いたかったらしいが、本当は心細いのが見え見えだ。

来たばかりで緊張していた間は感じなかったのだろうが、時間が経って少し慣れてきたから、環境の変化が身に染みてきたのだろう。

「こっちおいで、いっしょに寝よ。毛布持ってきてね」

ぱつとルーフェイアの表情が輝いた。これはかなりの甘えん坊だ。ロアにしてみても、見かけがせいぜい六、七歳のこの子は、幼い妹も同然だ。よく懐いていることもあって、このくらいで安心するなはいくらでも、と思う。

「ちょっと狭いけど、ガマンだよ」

ベッドの片隅に収まった少女に、持ってきた毛布をかけてやる。

「もしかしてさびしくて、寝られなかったんだ？」

「いえ、すごく、静かすぎて……」

人のベッドにもぐりこんでおいて、いいえも何もないのだが、ロアはそこは流してやった。きつと認めるのが恥ずかしいのだろう。

「静かすぎて、寝られなかったってこと？」

こくりとルーフェイアがうなずく。隣で小さく丸まるようすが、ともかく可愛い。

それにしても、うるさくて寝られないというのはよく聞ぐが、静かすぎてというのは初耳だった。

「……今まで、工事現場でも寝てたわけ？」

思わず妙な突っ込みをしてしまう。

それが面白かったのか、少女は少し笑って答えた。

「えっと、よく砲声とか、聞こえたり……あと、非常召集とか、あったので……」

「寝る環境じゃないじゃんソレ」

「どうやらやはり、少年兵あがりらしい。」

何かが一瞬引かなかったが、安心しかったルーフェイアの表情を見た瞬間、どうでもよくなってしまった。

「まあいいや、ゆっくり寝るんだよ」

「……はい」

遅いせいか、たちまち寝入ってしまった少女を見ながら、ロアも目を閉じた。

## Episode : 21

Rufair

「あー食った食った」

「ルーちゃんご馳走さまー」

「あ、こら、てめえら後片付けしろっ！　つか、作ったの俺だっ！」

にぎやかな声が響く。いまちょうど、みんなで夕食を食べ終わったところだ。

クラス分けのテストが終わったのはだいぶ前だけど、休みがあと二日の今ごろになって、ようやくあたしのクラスが決まった。

聞いた話じゃ、ずいぶんモメたらしい。飛び級がどうか、教官が言ってた。

でも飛び級って、なんだろう？

飛ばされて違うところへ行くのはイヤだから、イマドと同じクラスがいいと、言ったのだけど。

「あ、ちよっとキミ、何やってんの！　そのケーキはルーフェアのなんだから」

「えー、持ってっちゃダメっすか？」

「ダメっ！」

飛び級がイヤならと、あたしはAクラスになった。思ってたより、いい加減な決め方だ。

けど話を聞いたロア先輩はとても喜んでくれて、しかもなぜか「お祝いをする」ってことになって、それをしてたところだ。

この学院、クラス分けが決まるとお祝いする習慣があるらしい。

「ルーフェイア、このケーキここにしまうよ」  
「あ、はい」

最初は部屋で先輩と二人の予定だったのだけど、気がいたら人数が増えてた。エレニア先輩が来て、イマドも来て、その友だちもついてきて、ご飯が足りないからってイマドが作ってくれて、先輩も買出しに行つて……。

こうというのが「学校」なのかな、と思う。なんでお祝いになったかは今も分からないけど、みんなが集まって騒いで食べたりは、けっこう楽しい。

「ほらキミたち、そろそろ出てってくれないかな。ボクが怒られるから」

「へいへい」

「ルーちゃん、またねー」

「ロア、私も戻るわね」

急に静かになった。

「大騒ぎだったねー。おいしかったけど」

「はい」

最後に残ったものを二人で片付けて、やっとぜんぶ終わる。さっきまでの陽気さがいっしょに消えた気がして、ちよっと寂しかった。

「さ、今度はいつものやろうか？」

「……はい！」

急いで自分の魔視鏡の前に行つて、準備をする。毎日少しずつ教わるこれは、とても楽しみだった。

「あー、もしかしくなくても、明日で休み終わりだったけね。そうするとゆっくりやれるの、今晚くらいかな？」

「ですね……」

きちんと授業が始まったら、そろそろ夜更かしはできない。遅刻したら減点されてしまう。

「そしたらさ、今日はホントにやってみる？ ルーフェイアももう、校内なら少しできると思うんだ」

「え、でも……」



## Episode : 22

本当のことを言うとやってみたいけど、怖かった。なにしろやっているのは、見つかったらタダじゃすまないものだ。だから失敗できない。

でもあたしの腕じゃ、何かへまをする可能性が高かった。

「あはは、ルーフェイアは慎重だねえ」

ロア先輩が明るく笑う。

「だいじょぶ、ボクが後ろついてって、フォローするからさ」

「あ、それなら……」

気持ちを落ち着けて、教わったとおり始める。

まず全体の構造を見て、どこが動いているかをチェックして……。

「そうそう、そこ気をつけて。ほら、足跡残してるよ」

「え？ あー！」

通信網に残る痕跡を消しながら、ひとつひとつ教わったとおりやっていく。

あれ？

気になるものを見つけて、もう一度画面を確認したけど、間違いなかった。

「あの、先輩、これ……」

「学院長の魔視鏡だね。この時間に動いてるなんて、珍しいや」

先輩が言うには学院長、こういった新しい道具は苦手らしい。だから仕事をしている昼間とはかく、夜になると早々に止めてしまふんだそう。

「止め忘れかな？ 見てみよっか」

「あ、はい……」

ちよつとだけ気が咎めながらも、石の中の記録を覗いてみる。

「ガツコの資料ばっかだなあ。たいした物ないね」

なんだかほつとする。やっぱりこういうのには、あたしは向いてないのかもしれない。

「学院長も大変だね、こんなくだらないことまで訊かれるんだ。こんど会ったら、親切にしとこっか」

「ですね……」

本当に細かい雑務から院の方針、果ては学院生が起こした不祥事の後始末まで、ありとあらゆることが山盛りだ。

「どうする？ も少しやる？」

「え？ あ、いえ、今日はもう……」

なんだか疲れてしまって、これ以上続けられそうになかった。前線にいるほうがまだ楽だ。

「そだね、こういうの最初、すっごい疲れるし。」

あ、最後にこれだけ見てこっか」

あたしの代わりに先輩が操作して、記録の一覧が現れる。

「これ……伝言書？」

「そそ。でもこっちも、たいしたもんないね」

言いながら先輩が、一つの伝言に目を留める。

「これ、ルーフェイアのことだよね」

「え？」

驚いて表題を見ると、たしかにあたしの転入に関するらしい。「なんだろう」

興味津々という表情で、先輩が中身を開く。  
イヤな予感がした。

## Episode : 23

Loa side

ルーフェイアが緊張した表情で、ひとつひとつ操作をこなしていくのを、ロアは隣で眺めていた。

まだたどたどしい部分もあるが、初めて間もないことを考えると上出来と言っていいだろう。むしろこの短期間で、よくここまで覚えたと感心する。

「そうそう、そこ気をつけて。ほら、足跡残してるよ」

「え？ あ！」

言われて慌てる後輩が、可愛い。

だがあるところで、その動きが止まった。

「あの、先輩、これ……」

どうしよう、という表情で訊いてくる。

「学院長の魔視鏡だね。この時間に動いてるなんて、珍しいや」

学院長は年のせいかな、この手のものはあまり使わない。だから、夜になってまで動いているのは、稀だった。

「止め忘れかな？ 見てみよっか」

「あ、はい……」

ルーフェイアがちよっとためらってから、開く。

そのようすに、この子はこういうことに向いていないのかもしれない、とロアは思った。なにしろ素直でおとなしい性格だ。攻撃的なことにはどうしても、しり込みしてしまうのだろう。

だがそういったことは、取り返しのつかない事態を招くことがある。

何か考えてやったほうがいいかもしれない、そんなことを思いながら、ロアはざっと記録の一覧をを斜め読みした。

「ガッコの資料ばつかなあ。たいした物ないね」

もう少し何かあるのではと期待していたが、みごとなくらいに期待はずれだ。

「学院長も大変だね、こんなくだらないうまで訊かれるんだ。こんど会ったら、親切にしとこっか」

「ですね……」

どうでもよさげな雑務から院の方針、そうかと思えば学院生が起こした不祥事の後始末まで、まさしく何でもありだ。

どちらにしても収穫なしと判断して、ロアは手を止めた。

「どうする？　もしやる？」

「え？　あ、いえ、今日はもう……」

ルーフェイアのほうも初めての経験で、さうとう神経をすり減らしたようだ。そろそろ潮時だろう。

「そだね、こういうの最初、すっごい疲れるし。」

あ、最後にこれだけ見てこっか」

何の気なしに、見つけた一覧を開く。学院長が外部とやり取りした、記録の一覧だ。

こういうものは機密情報は期待できないが、ちよつと笑えるようなものがよく混じっている。

「これ……伝言書？」

「そそ。でもこつちも、たいしたもんじゃないね」

予想に反して、事務的な連絡ばかりだ。私的なやり取りは、ここではやらないようだった。

だが。

とある行で、ロアは予想もしなかったものを見つける。

「これ、ルーフェイアのことだよね」

「え？」

## Episode : 24

表題は「本校特別入学の件について」。日付などと合わせて考えると、ほぼルーフェイアのことに間違いないだろう。

「なんだろう」

興味津々、面白半分で記録を覗く。

中身は思ったとおり、ルーフェイアに関する事だった。だがこの学院内や分校ではなく、誰か学外の間人　おそらくルーフェイアの両親　に宛てたものらしい。

さすがにこれはまずいと、ロアは記録を閉じかけるが、その瞬間目に入った文字に、釘付けになった。

隣にいる少女の、フルネーム。ロアには名乗らなかった、本当の姓。

ルーフェイア「グレイス」シューマー。

今までどれほど探しても見つからなかった、敵の名。

「なるほどね。キミがシューマーの娘だったんだ」

ロアが立ちあがった。

「そう言えばこの間、『よく砲声が聞こえるところにいた』って言うってたもんね。他にもいろいろ。」

ボクもバカだな。なんで気づかなかったんだろう?」

思い返せば、何度もそれらしいものは、あったのだ。

言動のあちこちで、少年兵あがりなことを匂わせていた。事実、桁外れの戦闘力だった。何より、両親が健在ながら前線へと出る子供。ふつつならあり得ない話だ。

それなのに疑わなかったのは……外見と性格とに騙されたからだ。  
小柄で、折れそうに華奢な美少女。

おとなしく、すぐ泣き出す性格。

かのシュマーの人間というなら、もっと猛々しいものだと思い込んでいた。

いずれにせよ、敵は見つけた。

ロアの瞳に危険な光が宿る。

何かを感じ取ったのだろう、少女がうろたえながらも身構える。

「あの……？」

「死ねっ！」

問答無用とばかりに、ロアが手近にあったペーパーナイフを投げつける。

たかがペーパーナイフとは言え、これは金属製でしかもそれなりの重量だ。投げ方によっては十分凶器になる。

正確に少女の眉間へと向かって、至近距離からナイフが飛ぶ。

だがルーフェイアのほうも、それで決めさせたりはしなかった。  
放たれた凶器を戸惑った表情をしながらも、一瞬のうちに腕をかざして防ぐ。

にぶい音がしてナイフが少女の腕に突き立った。細いとはいえ鍛えられた筋肉と骨とは、その程度では碎けない。

が、それでも一瞬の隙が生まれる。

逃さずロアは間合いを詰めた。同時に強烈な蹴りを繰り出す。  
それをルーフェイアは、ふわりと身体を入れ替えただけで避けてみせた。

（ さすがに、シュマーの人間なだけあるかな ）



生半可な攻撃では仕留められそうにない。

「先輩？」

可愛らしい顔に困惑を浮かべながら、少女が問う。まさか彼女も、いきなり攻撃されるとは思っていなかったようだ。

「可愛い顔して、とんだ魔物だよね！」

キミたちのおかげで、ボクの家族は全員死んだんだ……！」

ルーフエアの動きが止まった。

すかさずロアが跳びかかる。

そのまま組み敷いて、細い首に手をかけた。

悲しげな表情。

だが構わず、ロアは少女の首を締め上げる。  
妹と同じ年の少女。

「これでひとつ、貸しを返してもらおう！」

## Episode : 25

R u f e i r

あたしたち シュマーのせいで家族が全員死んだ、そう、先輩が叫んだ。

どう答えたらいいのかわからなくて、一瞬動きが止まる。

その隙を、先輩は逃さなかった。

たちまち組み敷かれる。

先輩の手が、あたしの首にかかった。

「せんば……どうして……」

思わずそう言ったけれど、先輩は聞いてなんかいない。そのまますごい力で締め上げてくる。

振りほどこうとしたけれど、片腕がやられていてどうにもならなかった。

息が詰まる。

母さんの言ったこと、正しかった。

心配そうだった、母さんの姿を思い出す。

シュマーはどこで恨みを買っているかわからない、別れ際にそう言われた。

もちろんそれはあたしも承知している。うちは代々人殺しをしてきたのだから。

先輩の家族も、誰かシュマーの人間が絡んだ話で死んだんだろう。もちろんあたしじゃない。けど、外の人間から見たら同じことだ。それにあたしの手だって、今でも十分血に染まっている。

結局、あたしがバカだったのだ。

亡霊たちの言うとおり、あたしの生きる場所はその地獄しかない。それなのに、のこのこ出てきたのだから。

だいいちあたしさえいなければ、シユマーの人間でも、死なずに済んだ者がかなりいる。

あたしさえいなければ。

もう、抵抗する気もなかった。

L o a   s i d e

「これでひとつ、貸しを返してもらおう！」

叫ぶロアの身体の下、すでにルーフェイアは声も出せない。

さらに腕に力を込める。

骨を砕こうかという勢いで。

が、その時。

お姉ちゃん、やめて！

（え？）

懐かしい声を聞いたと思った。

同時に、ブレスレットにして身に着けていた、妹の形見が光りだす。

そして唐突に、周囲の情景が変わった。

音はなく、映像だけ。

（なにこれ……?!）

どうやら戦場のようだった。だがロアが知る故郷の街ではない。

どこかもっと別の、森の中だ。

そこに、青年と少女がいた。

青年のほうに見覚えはない。だが、少女のほうは。

（ルーフェイア？）

間違いない。

（なんなの?!）

ロアが戸惑っているうちにも、状況は変わっていく。

## Episode : 26

青年が何事か叫んで、ルーフェイアのほうへ走り寄った。  
少女もその声に振り向き、ぱっと身を伏せる。

高位の炎魔法が炸裂した。

青年がまともにそれを食らって、文字通り焼かれて倒れる。

起き上がりかけたルーフェイアが泣きながら何か言い、それにか  
すかに青年が答えた。

（ちょっと待つてよ！ どうしてこんなもの、ボクが見なくちゃな  
らないのさ！！）

妹を、家族を見殺しにした連中なのだ。

だが。

（ボクと、同じ……？）

目の前で近しい人を傷つけられて涙する彼女は、立場は違っても  
自分と同じだった。

いや、同じではない。

あの時の自分はただ茫然としているだけでよかったが、彼女の置  
かれた状況はもっと厳しかった。

唇をかねで立ちあがり、青年に背を向ける。

生き延びるために。

おそらくいま手当てをすれば、青年は命だけは助かるだろう。だ  
がそうすればその隙に攻撃を受け、今度は二人とも死ぬことになる。  
だから、見捨てた。

声は聞こえない。なのにルーフェイアの、とても言葉では現せな  
い心が響く。

魂を引き裂かれるかのような慟哭。  
だがそれを、齒を食いしばって耐えている。

森を抜けるルーフェイアの目の前に、いくつかの人影が立ちはだ  
かった。

（うちの傭兵隊？）

見間違えようのない、あの制服。  
そこへ少女は容赦なく突っ込む。

相手が子供なので油断していたのもあったのだろっ、瞬く間に二  
人が刃の餌食になった。

さらに最後の一人を、たちまちのうちに切り伏せる。

嘆きながら。

己の運命を呪いながら。

それでも彼女は太刀を振るう。  
その心が叫ぶ。

どうして！

それは八年の間、ロアが叫びつづけてきた言葉と同じだった。  
どうして家族は死ななければならなかったのか。

どうして自分だけ生き残ったのか。  
どうして。

ふっと、周囲が元に戻った。

（夢……？）

どちらにせよ、一瞬の出来事だったらしい。まだロアの手は、ル  
ーフェイアの白い首を締め上げていた。

ブレスレットの石は、まだ淡い光を放っている。

少女と目が合った。

そこにあっただのは、恐怖でも悲しみでもない。

どこまでも深い、絶望。

その絶望した瞳から、涙がこぼれる。

## Episode : 27

(どっちも、地獄か……)

ロアはそつと、手を離す。

「……ごめん」

その言葉に、少女は咳き込みながら首を振った。

さらにしばらく咳き込んで、やっとかすかに声を出す。

「あたしが……いけないんです……。血に染まった手で……夢を叶えたいなんて……」

ロアが回復魔法をかけてやると、彼女はようやく咳き込むのを止め、涙に濡れた顔を上げた。

「ルーフェイア……」

彼女が、そして自分がその手に握り締めるものは、希望ではなく絶望。

「あたしみたいな人間、戦場の外に、出たらいけないかったです。生き延びるんじゃなかった。死んじゃえばよかった……」

その同じ言葉を、自分も何度繰り返しただろう？

だから、言えた。

「そんなこと、ないよ」

殺す側と殺される側、結局どちらも変わなかったのだ。

理不尽な状況に放り込まれ、振り回され、ただひたすら生き延びるのに精一杯だった。

選りたくても、選ぶ余地さえなかった。



「あたしも辛かったけど、ルーフェアも辛かったね……」  
泣きじゃくる少女の頭をなでてやる。少なくともこの子は、悪くない。

どのくらいそうしていただろう？

ようやくルーフェアが泣くのをやめた。

その彼女に、しばらくためらってから尋ねる。

「あのさ……キミはこれで、いいの？ 学院にいたら、また……」  
戦わなくてはならない、その言葉は言えなかった。だが察したのだろう、ルーフェアがあまりにも悲しい微笑みを見せる。

瞬間、ロアは悟った。

この子は つかの間の夢を見に、ここへ逃げてきたのだと。  
シユマーという家が、少女に何かを強いている。けれどこの子はそれから逃れたくて、なのに逃れることは出来なくて、今だけでもとここへ来たのだ。

なぜこの子を学院長がルールを無視し、直接ここへ入学させたのか。その疑問も氷解する。

「ばか」

ロアはルーフェアを抱きしめた。

ならばせめて、ここに居る間だけでも、その手に握るのは希望にしてやりたい。笑顔でいさせてやりたい。

「ひとりで抱え込んだら、ダメなんだよ」

ロアの言葉に、再びルーフェアの瞳から涙がこぼれた。

もし妹が生きていれば、こんなふうに腕の中で泣いただろうか？  
いずれにせよ、傷ついた心でまだ立とうとする彼女が、いとおしかった。

どれほど辛かっただろう？ どれほど苦しかっただろう？

同じ苦しみを味わった、自分と少女。

腕の中で泣く彼女のぬくもりを感じながら、ロアは心に決める。  
たった二年で命を終えてしまった妹への、哀悼の意味も込めて。

ボクが、姉さんだよ。

あとがき

最後まで読んでくださって、ありがとうございます。前作・前々作とともに、感想等いただけたらうれしいです。

なお、明日より第4作「葛藤」の連載となります。

お知らせ

このところ「小説家になろう／読もう」が、非常に重くなっています。

筆者サイト経由ですと比較的スムーズに繋がりますので、ブックマーク等でどうぞご利用ください

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9282d/>

---

抱えきれぬ想い ルーフェイア・シリーズ03

2011年2月6日14時24分発行